

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

ハリー・ポッターと愛の守護霊

【作者名】

征マル

【あらすじ】

『愛』

かつて、闇の帝王の配下に置かれ、唯一、闇の帝王に愛された人間。

いや、人と言うにはあまりにも彼女は不思議すぎた。

ともあれ、闇の帝王は、暴力を『愛』と取り、彼女を激しく傷付けた。

それを見兼ねた、セルブス・スネイプは殺されるのを覚悟で彼女を逃がした。

あの、ホグワーツ城へ。

そして彼女は、英雄ハリーポッターと共に同じ学舎で学んでいる。

闇の帝王に愛され、ハリーポッターに愛され。

闇に愛され光にも愛された少女。

『愛』の実体化　いや、愛の守護霊だ。

闇の帝王、ハリーへの予言。

そして、『愛』の守護霊の謎は絡み合い、複雑になっていく。

光も、闇も、『愛』を渴望し、『愛』を望んでいた。

銀髪の彼女は何を思っているだろうか。

銀髪の彼女は何者なんだろうか。

彼女を軸に、物語は廻っていく

プロローグ

「おはよう、メイレー。」

心地の良い声が鼓膜を響かせる。

彼女はゆっくりと瞼を開いた。

「おお、起きたの。メイレー。」

光沢のある絹のローブを何重にも重ね着している老人がいた。

長く伸ばされた白い髭は、彼の容姿にあった偉大さを醸し出している。

「じつじて話をするのは初めてじゃ。ほっほっほっ」

マグカップからコーヒーを一飲み。

彼女はなにがなんなのか分からなかった。

「……………」

「声は出るかの？」

声？

彼女は首を傾げた。

声は、どうだったかな……………」

「あ……………」

「声は出るようじゃの。安心したわい」

朗らかに微笑を称える老人。

この老人は誰なんだろう。

「な、……まえ、は、なんです、か」

絞り出す様に紡いだその声を、老人はちゃんと聞き取ったようだ。見た目に合わず、聴覚は良いのか、と彼女は思った。

「わしとしたことが自己紹介を忘れとった！

わしはアルバス・ダンブルドアじゃ。

アルバスと読んでくれると嬉しいのお」

そしてまた、朗らかにほっほっほっ、と笑うダンブルドア。

咄嗟に彼女は自己紹介をしようとした。

だが、声が出なかった。

いや、彼女は自分の名前を知らなかった。

「お主の名はメイレー・シックザールじゃ。メイレー・シックザール」

言い聞かせる様に2度繰り返す言うアルバス。

「あ、りがとう、アルバス」

まだ震える声で彼女　メイレーは言った。

「いいや、礼にも及ばんぞ」

ニコリと笑い、茶目っ気タップリにウィンクをするダンブルドア。メイレーはどう対応すれば良いのか分からず……困ってしまった。そんなメイレーを見て、アルバスはすまんの、とまた笑った。

「おお、そうじゃ。お主に引き合わせたい人物がおるんじゃった」

ちよつとここで待つておれ、とダンブルドアは言い、その場を去る。

メイレーはとりあえず周りを見渡してみた。

なにもしていないのに湯気をあげるヤカン、なぜか走り回る列車。周りには無数の本と、本棚の上には動く肖像画に、ボロ帽子。なにやらたくさん置いてある机の横には、大きな壺の様な物。反対側には燃え上がるような赤色の不死鳥がいた。

見れば見るほど不思議な部屋だ。

ここで暮らすアルバスはどんな事をしているんだろう……と無意識にメイレーは思った。

「メイレー」

後ろからダンブルドアの声がした。

メイレーは後ろを振り返る。

ダンブルドアの後ろには、全身真っ黒の鉤鼻の男がいた。

「メイレー、これはセルブス・スネイプじゃ。

後々お主に教鞭を振るうこととなる人じゃよ」

「よ、ろしく、おねが、いします」

震え声でスネイプに挨拶をする。

「ようこそ。」

対してスネイプの対応は素っ気なかった。

「おお、セルブス。無愛想になる必要もないんじゃないよ」

「いえ、我輩はメイレーに近付いてはなりませんので」

「なぜじゃ……ああ、そっじゃったな。」

どこか納得した口調でダンブルドアは言う。

話についていけないメイレーは、困惑していた。

「すまぬのメイレー。」

こういうとダンブルドアはメイレーに向き合った。

何事か、とメイレーは身構える。

「メイレー、お主は次の日、セルブスと共にホグワーツへ入学するための準備をしてもらおう」

安心せい、セルブスは良い奴じゃ、とコッソリ耳打ちしてくるダンブルドア。

いや、不安なんて持っていない。

逆にメイレーは安堵感を覚えるくらいだった。

チラッとスネイプを盗み見る。

やっぱり安心する。